

アミール・ティームールと シャフル・イ・キシユ

加 藤 和 秀

はじめに

1340年代におけるチャガタイ=ハン国の分裂後に、マーワランナフルを中心に展開した激しい政争は、支配者たるトルコ化したモンゴル諸部族、いわゆる「チャガタイ族(the Chaghatays)」が在地の農耕定住社会の政治的・社会的・文化的諸条件に規定されつつ、その地位を維持強化すべく自らを再編成していく過程であった。その過程はモンゴルによる中央アジア支配の限界の克服という、いわば歴史的要請に基づくものであり、1370年をもって印されるティームール朝(Timurids, 1370-1507)の成立はそれへの一つの解答であったといえる。この意味においてティームール朝の歴史的意義は、先ずモンゴル支配との相違に見出されるべきであり、具体的には同朝の各時期における支配権力や支持基盤、あるいは在地社会やイスラーム文化との関係といった諸相の特質の究明を通して明らかにされねばなるまい¹⁾。

本稿はこうした問題意識に依拠して、1370年に成立したティームールによる統一政権(「ティームール朝」とはひとまず区別して「ティームール政権」と呼ぶ)の政治的・軍事的基盤、並びに社会経済的・文化的背景について解明し、それがチャガタイ・ハン支配からティームール朝への政権推移の過程にあつていかなる歴史的役割を果たしたかを究明せんとする試みの一つである。

所でティームールが、キシユ(Kish)地方に根拠を有したバルラス(Barlās)部族の首長いわゆるアミール(Amir)として台頭したことについては、従来よりなんらかの形で触れられることはあっても、極めて簡単な叙述しか為されておらず、その根拠が詳細に示されたことはない²⁾。ティームールの台頭の社会経済的・文化的背景は勿論のこと、その政

1) この問題に関する概略的見通しについては、加藤 1979を参照。

2) 例えば、Barthold 1918: 41/16; Barthold 1962: 219; Якубовский 1964: 53-55; Roemer 1986: 44-45 などを見よ。

治的基盤についてさえも具体的には把握されていないのであり、従って、「ティームール政権」の歴史的位位置づけもあいまいなまま、「ティームール朝」の中へと漫然と組み込まれてきた。そこでここでは、ティームール台頭期における「アミール・ティームール」と「キシュ地方(あるいはキシュ市)」と「バルラス部族」の関係の具体相を把握することに主眼点を置き、「アミール・ティームール」と「キシュ市(Shahr-i Kish)」の関係と、「アミール・ティームール」と「キシュ地方(Vilayat-i Kish)」の関係の二点に分けて追究していきたい。本稿はその第一として、「アミール・ティームール」と「シャフル・イ・キシュ」との関係について、基本史料の記述を整理し且つ従来の諸研究に再考を加えようとするものである。

なおティームールと特にキシュ市との関係については、すでに Barthold のティームールの埋葬に関する研究(1916)や、考古学的知見を加えて再検討した M.E.Masson 及び Pugachenkova の研究(1953)などがあるが、なお史料の扱い方や諸問題の解釈に再考の余地が残されているように思われる。しかし、ここではあくまでもティームール並びにティームール政権の政治的・軍事的あるいは社会経済的・文化的基盤の解明に重点を置き、それに関連する範囲内において出来る限りこれら先学の研究に触れることとしたい。

主として依拠する史料としては、先ず第一に1402-1404年頃にティームールの命令によって編纂された公式の年代記である Nizām al-Dīn Shāmī の『勝利の書』(Zafar-nāma)が挙げられる。ティームール自身の意向の反映した最も信頼の置ける史料であるが、記述が簡潔でやや情報量が少ない [Lambton 1978: 1 et seq.; Manz 1976: 191-192; Woods 1987: 85-87]。

これを補うものとして、ティームール朝第一の歴史家として著名な Ḥafiz-i Abru の歴史並びに地理に関する諸著作がある。ティームールに関する部分についてはほぼ上述の Shāmī の記述に忠実に従いつつ、重要な補足を加えている。全てティームール没後に書かれたものであるが、彼自身ティームールの側近の一人であり、その遠征にもしばしば同行しているから、その情報は充分信頼に足る [Barthold 1898: 74 et seq.; Lambton 1978: 1 et seq.; Woods 1987: 96-99]。

さらに Sharaf al-Dīn 'Alī Yazdī の『勝利の書』が挙げられる。Shahrukh 治下に行なわれた大規模な編纂事業によって1425年に完成したティームール伝で、全体の構成はほぼ Shāmī の同名の書に従うが、他の異なる情報源からの多くの詳細を加えており、極めて有用である。ただし、編纂時期におけるティームールを栄光ある王朝の偉大な創設者として捉える立場を反映し、強いバイアスが随所に見いだされるので、参照には注意が必要で

あろう [Woods 1987: 99-105]。

ティームールの時代により近く、かつ情報源が確かな点において、当該課題の究明に最も適当な以上三点の史料を中心に利用し、他の史料は必要な場合にのみ用いることとする。

I

Yazdī によれば、ティームールはイスラーム暦736年 Sha‘bān 月25日火曜日(西暦1336年4月8日)の夜、「キシユの魅惑的な地で(dar ṣāhir-i khīṭa-yi dil-kish-i Kish)」生まれた。父の名は Tarāghay, 母の名は Takīna-khatūn という [Yazdī: I-8/86b-87a]。Takīna-khatūn の素性は不明であるが、タラガイはれっきとしたモンゴルの名族バルラス部族の首長クラス、つまりアミールの家系に連なる人物であった [間野 1976: 125]。

キシユとは、Samarqand の南方に広がる Kashka-daryā 流域地方並びにその中心都市の名称である。キシユの名はすでにイスラーム以前から Soghd 南部の中心都市あるいは都市国家の名称として知られ、7世紀以降、中国史書に「史国」あるいは「佉沙」・「羯霜那」または「乞史」としきりに記録されている [『隋書』西域傳史國条；『新唐書』西域傳史國条；『大唐西域記』卷一・卷十二]。イスラーム時代に入っても Mawarā' al-Nahr の主要都市としての地位を維持し、9-10世紀には、城塞(quhandiz)・内城(shahristān)・郊外(rabadh)を有する堂々たるイスラーム都市として登場している。しかし、10世紀半ばに Samarqand と Bukhara の興隆により衰退の道を辿り始めて以降、その名は聞かれなくなり、14世紀後半に至ってティームールの勃興とともに再び脚光を浴びることになった [Barthold 1968: 134-135; Strange 1966: 469-470; Bosworth 1980: 181-182]。

ただし、14世紀半ば頃にはキシユの名は主にトルコ系の住民によって用いられたようで、一般には Shahr-i Sabz(「緑都」の意)という名称が用いられ始めていた [Shāmī: 15]。この名称の語源については従来より様々の説が語られてきているが、例えば Yazdī の「春の季節にはその町や地方の屋根や壁までが緑一色になるほど、庭園や野が新鮮な緑に(満ち満ちる)ために、『緑都』(Shahr-i Sabz)(の名)をもって知られるようになった」[Yazdī: I-221/163a] とするとき、その町を中心とするオアシスの緑豊かな様にその起源を求めるのが最も妥当と考えられている [Masson 1953: 1-107; Bosworth 1980: 182]。

Shahr-i Sabz の名が記録された最初の例は、Buyān Qulī Khān 治下の752年(西暦1351年)に鑄造された dinar 銀貨の銘においてであった [Barthold 1968: 134; Masson 1953:

I-106 ; Bosworth 1980 : 182]³⁾。この名称がティームールの栄光を物語る壮大な宮殿 Āq Saray のそびえる町の名として現在に至るまで用いられてきたが、一方、古い伝統を誇る Kish の名も18世紀頃までは並行して時々使用されていたらしい⁴⁾。ティームール朝期の年代記においてはむしろキシュの名の方が、「dil-kish-i Kish」というごとき装飾句を伴った形で頻繁に用いられている点から推察するならば、その名は Shahr-i Sabz の町のいわば雅なる古名として人々特にトルコ系住民に好まれて後まで使われ続けたのではなかろうか。

ティームール朝期の Shahr-i Sabz の町に関する研究は、M.E.Masson が本格的な考古学調査を実施した1942年以降急速に進展した⁵⁾。そこにおいて先ず明らかにされた点は、Shahr-i Sabz の町の周辺には13世紀以前の居住の形跡がなんら存在せず、また14世紀以降に造られたその城壁には、前代のものへ人工的補修を加えた痕跡が全く見出されなかったことである。つまり、そこは古代都市キシュがかつて存在した地そのものではなかった [Masson 1953 : I-105-106]。これまでの調査では、現在の Shahr-i Sabz の北の Kitab の町の近くに残る城塞の遺跡が古代のキシュの城塞跡とみなされ、13-14世紀にその地から南へ居住の中心が移転されるに従ってキシュの名称もそこへ移されたものと推測されている [Masson 1953 : I-105-106 ; Pugachenkova 1958 : 135 ; Pugachenkova 1976 : 59 ; Крашенинникова 1978 : 527]。ティームールが登場した頃、つまり14世紀半ばのキシュ市 (Shahr-i Kish) の規模は不明であるが、かろうじて公式貨幣の鑄造地として知られる程度であり⁶⁾、市域を取り囲む城壁あるいは城塞の存在を示す記録が1380年頃におけるティームールによる市城壁の建築以前には見出されないこと、あるいは後のティームールによる他都市からの市民の移住政策や諸建築の盛んな建造などから推測す

3) さらに Masson [1957 : 64] は、同じ Buyān Qulī Khān の名で発行された758年 Ramadān 月(西暦1357年8-9月)付け Shahr-i Sabz 銘の dīnār 貨を挙げている。

4) Masson [1953 : I-106] は16世紀まで用いられたことを確認しており、さらに18世紀半ばに書かれた МҒи Muhammad Amīn-i Bukhārī の ‘Ubayd-allah-nāma (Мир Мухаммед Амин-и Бухари, Убайдулла-наме, Перевод с таджикского...А. А. Семенова, Ташкент, 1957, стр. 41 и т. п.)にもその使用例が見出される(小松久男氏の示唆による)。

5) Masson 1953がこの調査の最終的な報告書にあたる。以後の考古学的調査については、Лунина 1969, Усманова 1973 等を見よ。

6) Masson [1957 : 69] は、分析対象とした14世紀半ばの貨幣鑄造数を鑄造地毎に列挙するが、Bukhārā(195), Otrār(188), Samarqand(55), Tirmid(5)に対して、Shahr-i Sabz はわずか一例しか挙げられていない。

れば、当時都市としてはいまだ小規模なものに留まっていたのであろう。かくして、この町の過去の栄光についての次の Yazdī の記述は、例え前身たるキシユの町に関して述べたものにしても、牽強付会のそしりを免れえまい。

諸歴史書のあるものにおいては次のように述べられている。キシユの町 (Madīna Kish) は過ぎ去りし日々にはイスラームの偉大なる学者たち ('ulama') の集う地であった。そして、名高い伝承学者 (muḥaddith-an) の中の三人の偉大なる Imām, Abū Muḥammad 'Abd-allāh b. Ḥamīd b. Naṣr al-Kishī と 'Abd-allāh b. 'Abd al-Raḥman al-Dāramī al-Samarqandī と Abū 'Abd-allāh Muḥammad b. Isma'īl al-Bukhārī—神よ、彼らを嘉し給え—がその地に住んでいた。そしてその頃には、学究の徒 (ahl-i 'ilm) が諸学の光輝を獲得すべく、諸地方諸方面からその甘美なる都市へと向かっていた。その中には、Abū al-Ḥusayn Muslim b. Ḥajjāj al-Qushayrī al-Nisabūrī が(おり)そこへ赴いて、'Abd-allāh b. Ḥamīd al-Kishī から学んでいた。そして、多くの Imām や博士たちがそこに居て、その全てが講義や教授のクラスを有していた。この理由により、キシユはまたの名を“知と教養のドーム”(Qubbat al-'Ilm wa al-Adab) と称するようになった。[Yazdī: I-221/163a]

Masson は、13世紀の Yaqūt の『学者文人辞典』には上記の三人の Imām の名がいずれもキシユの項には述べられていない点を挙げて、Yazdī の記述が彼自身による後の創作であると断じ、それはむしろ古代以来のキシユとモンゴル以後の Shahr-i Sabz との不連続性を示唆するものとしている [Masson 1953: I-112-113]。

いずれにせよ、Shahr-i Sabz がティームールの手によって初めて著しい発展を遂げたことは疑いない。以下、ティームールの活動に従って彼と Shahr-i Sabz (Shahr-i Kish) の関係を追っていきたい。

II

先にも述べた通り、ティームールはこの「キシユの魅惑的な地に (dar ṣāhir-i khīṭṭa-yi dil-kish-i Kish)」生まれた。しかし、この表現は、彼がキシユ地方に生まれたことを示すものであっても、その市中で生まれたことを指すとは受取りにくい。因みに、アラブの歴史家 Ibn 'Arabshah はティームールがキシユの近くの Khwaja Ilghar という村で生まれたと断言する [Ibn 'Arabshah: 4]。現在 Shahr-i Sabz の南西13kmに同名の村が存在し、村人達はその村がティームールの生地であるとの言い伝えを保持しているという [Masson 1953: I-109]。この伝承の信憑性はともかく、他にティームールの生地をキシユ市内とす

る情報が見出されない限り、Ibn ‘Arabshah の記述は少なくとも彼の生地がキシュ近在の村であったことを示唆するものであろう。これに関連して次の Shāmī の記述が注目される。

[762年(西暦1361年), Mughūl 軍のもとを離れ Khwārazm へ向かったティームールは、再度アム河を渡ってキシュ地方へ潜行して、] Samarqand へ向かい姉の Qutlugh Turkān Āgha の家(khāna)に降り立ち、48日間そこに留まった。そして、彼についての噂が人々の間に広まったので、(そこを)出立して Shahr-i Sabz の地域に向かい、 Ajīghī という村(dihī Ajīghī nām)に降り立ち、そこにさらに48日間滞在した。そして、そこから出立して夜を衝いてアム河に達した。[Shāmī: 21]

Yazdī は上記の箇所を「…キシュの地域に入り、北極星のごとき(Qutbvar) Ajīghī という村に諸天体がさらに48回世界を巡るまで留まった」[Yazdī: I-54/103a]と記すが、その「北極星のごとく」という修辞の用い方や、姉の家に滞在したのと同じ日数をキシュや Qarshī などティームール馴染みの町ではなく、「Ajīghī という名の村」という表現に見られるごとき無名の村に留まったことなどは、この村がティームール個人と特定の関係を有したことを推測させる。一方、Naṭanzī はこの村の名を Niyāzī とし、それがティームールの mulk であったとする[Naṭanzī: 214]。mulk とは、イスラーム土地制度上におけるいわゆる私的所有地を指す概念である。つまり、Naṭanzī によればこの村はティームールの私有地であったことになる。この情報については現在これ以上確かめようがないが、ティームールが私有地を所有していたとしてもなんら問題はないのではないか。

例えば、1367年頃ティームールが Amīr Ḥusayn に対抗すべく、当時 Tashkend 方面に居た Bahrām Jalāyī と Kay-khusraw の支援を求めに赴いた際の記述中に次のごとき一文がある。

[Bahrām Jalāyī は] Amīr Ṣāhib-qiran に対してふさわしい奉仕を提供せず、糧食や馬料も送付しなかった。それどころか、高貴なる khāṣṣa(khāṣṣa-yi sharīfa)に付属した諸地を(自ら)管理し、帝王(Pādshāh, Mughūlistān Khān のこと)のために税(māl)を徴収するとの理由を口実にしていた。[Shāmī: 46]

Yazdī はより明確に、「その地域における陛下(Ān-ḥaḍrat)の高貴なる khāṣṣa に付属した諸地を、Khān の財庫のために税を集めるとの口実をもって管理していた」とする[Yazdī: I-120/126b]。khāṣṣa とはこの場合特に王侯個人あるいはその所有物を意味し、土地制度上では王領地を指す[Beg 1978: 1098-1099]。ここではティームールがすでに君主となっていた段階で記述されるにふさわしい表現として khāṣṣa を用いているが、要するにティームールはすでにこの時期、Tashkend のごとき離れた地方にも土地を所有し

ていたらしい。そして、この所有地に関して Naṭanzī は、ティームールの「金(錢)で購入された村々(dīh-hā-yi zar-kharīda)」と記す [Naṭanzī: 247]。こうした記述によればティームールが政権を掌握する前にすでにいくつかの村々を *mulk* として所有していた可能性は高い。それらのあるものは上述したように彼自身によって購入されたが、相続によって彼の手に入ったものもあったであろう。いわゆる遊牧軍事貴族層アミールの土地所有の問題は、モンゴル期イラン及び中央アジア史研究における未解決のテーマでありなお慎重な検討を要するが、筆者自身がかつていささか分析を加えたことのある、1326年にブハラにて作成されたワクフ文書から、アミールに所属すると思しき幾人かが *mulk* 所有者として挙げられうる点を考慮すれば⁷⁾ 14世紀半ば頃におけるアミール層による土地所有の存在がかなり高い確率のもとに見込まれよう。つまり、この時期のアミール層の経済的基盤として、こうした *mulk* 所有が無視できない大きな要素として現われてくることになる。ここでは、ティームール政権の社会経済的基盤の解明に関わってさらに綿密な検討を要する問題として以上の指摘のみに止めたい。

要するに、ティームールが生まれそして育ったのは、キシユ市近在の Ajghī 村のような(恐らく父タラガイから後に彼が相続した)村あるいは村々の一つにおいてであったと思われる。スペインのカスティーリヤの使節 Clavijo の報告に、「タムルベクの父は、このチャカタイ族に血のつながる良家の出であったが、三・四人の騎士を持つのみ的小身であった。彼はこの町(キシユ)のはずれの村に暮らしていた。彼の如く良家の者は、村とか草原に暮らすのを好み、町に住むのを好まなかった。彼の息子も同様であった。それ故に、彼もはじめは、その手もとに四・五人の騎士しか持っていなかった」とある⁸⁾ のは、まさにこうしたティームール出生前後の時期におけるタラガイ父子の置かれた状況を良く伝えるものと言えよう。またこのことは当時いわゆるチャカタイ族の一部がすでに遊牧生活を離れて、定住生活に馴染みを深めつつあったことを推測させる。ティームールが後に Samarqand やキシユ市に盛んに建築事業を展開したり、イランなどから学者・芸術家・職人たちをしきりにこれらの町に移住させたりしたのも、こういった環境において培われた定住文化への並々ならぬ関心の現われと見ることができよう。

7) この点に関しては、口頭にてすでに発表済み(「14世紀前半西トルキスタン史について―ケベク・ハーンの支配を中心として―」, 於, 東京外国語大学 AA 言語文化研究所イスラム化プロジェクト昭和48年度合同会議)であるが、今後のティームール朝史研究の進展に従っていずれなんらかの形で発表するつもりである。このワクフ文書については、加藤 1970; 加藤 1971を参照せよ。

8) Clavijo 1928: 210; Clavijo 1967: 189; 訳文は間野 1976: 121による。

III

さて、ティームールとキシュ市との関係が初めて明らかになるのは、彼の父タラガイの埋葬に関する記述においてである。

鼠年(1360)にあたる762年(1360/1361)に、[タラガイが]キシュの魅惑的な地(khitta-yi dil-kish-i Kish)において“おお魂よ、満足して安らげ。汝の主に戻れ、歓喜しご満悦にあずかって”(Qur'an, 27. 28)という呼びかけに応じられ、父、兄弟、その他の親族のそばに葬られた。そして775年(1373/1374)に Şahib-qiran[陛下]の意図の建築家は、大モスク(Masjid-i Jami')の脇に位置していた偉大なる Shaykh, Shams al-Dīn Kulā[r]...“彼の墓を清め給え”...の廟に隣接してドーム(qubba)をお創りになり、彼をそこにお移しになった。[Yazdī: 83a]

タラガイが最初に埋葬された一族の墓は恐らくキシュ市近傍に存在したのであろう。しかし、ティームールが後に父の墓をキシュ市内に移したのは、明らかに771年(1369/1370)における政権掌握と密接に関連しており、彼の地位の安定に伴って実行可能になったものと思われる。

ところで、ここに述べられている Shaykh Shams al-Dīn Kulār なる人物については情報が極めて少ない。後の聖者伝は、彼と、かの Naqshbandī 教団の祖である Baha' al-Dīn Naqshband や, Bukhārā 近郊 Sukhārī 村出身の Sayyid Amīr Kulāl との交流について様々に記すが、相互の関係については錯綜していてまだ確定されていない[Barthold 1916: 67-68; Masson 1953: II-122]。Barthold は Shams al-Dīn Kulār と Amīr Kulāl とを同一人物視する Jami' の立場に加担し、Kulār は Kulāl の誤りとみなす⁹⁾。しかし、ここでは取り敢えず Yazdī の Tehran edition 及び Tashkent edition に従って Kulār を用いることにする。いずれにせよ、そこから明らかになることは、Shams al-Dīn Kulār が主にキシュ地方で活動していた当時有力なスーフィーの一人であったということである。

Yazdī によれば、ティームールの父タラガイはこの Shaykh に傾倒し彼のもとにしきりに通っていたといい[Yazdī: 83a], また Ibn 'Arabshah によれば、ティームール自身も彼の庇護のもとにあり、その成功の多くを彼の祈りに負っていると自ら語ったという

9) Barthold [1916: 67-68] はその根拠として、Ibn 'Arabshah が前者の nisba を Fakhūrī (< fakhkhar(ī): [Arabic]=potter)とし、また Kashifī が Kulār の意味として Dash-kār ([Bukhārā dialect]=potter)を挙げている点、並びに Yazdī の Calcutta edition に Kulāl ([Persian]=potter)と記されている点を指摘する。

[Ibn 'Arabshah : 6-9]。先の Yazdī の記述に見られたように、ティームールが父の遺体のみを一族の墓地からキシユ市内の Shams al-Dīn Kulār の墓の隣に移したのも、また後にティームールがキシユに滞在する時には必ずこの Shaykh の墓に詣でている [Yazdī : I-566/287a-287b, II -419/456b] のも、タラガイ父子と Shams al-Dīn Kulār のこうした個人的関係を裏付けている。この関係がティームールとキシユ市との結び付きを密接にした一つの要因であったのではなかろうか。そしてここにはまた、当時のチャガタイ族の間における、スーフィーの聖者に庇護を願いその baraka(神から与えられた超能力)の恩寵に与ろうとする形式でのイスラーム信仰のあり方が如実に示されているといえよう。

所で、Masson によれば、Shaykh Shams al-Dīn Kulār の墓の近くにあったという、明らかにティームール以前から存在した大モスク (Masjid-i Jami') は、現在キシユの町の南部に大通りに面して立つ Gök-gunbadh (“青のドーム”) と呼ばれる、ティームールの孫の Ulugh-beg が 1435 年に創建したモスクの北側にあったらしい。そして、この Gök-gunbadh モスクの前庭を隔てて真東に位置する小さな建物が Shams al-Dīn Kulār の廟であり、その南側に接して立つ現在 Gunbadh-i Sayyidan (“サイイドたちのドーム”) と呼ばれるドーム建築の中にかつてタラガイの墓があったという。後者の建物はやはり Ulugh-beg が自身の一族の廟として 1437/38 年に建てたもので、16-17 世紀以降そこに三人の Sayyid の墓石が運び込まれたらしい。Ulugh-beg の時代には、以上の建築群は統合されて Dār al-Tilawat (“瞑想の館”) と称されていた [Masson 1953 : 129-133 ; Pugachenkova 1958 : 142 ; Pugachenkova 1976 : 91-101]。

さて、このタラガイの改葬から二年ばかり後の 777 年あるいは 778 年 (1376) に、長男の Jahāngīr が Samarqand にて急死した。享年わずか 20 才であり、最愛の息子を失ったティームールの悲痛は極めて大きかったという¹⁰⁾。

Yazdī はさらに次のように記す。

[皇子 Jahāngīr の] 高貴なる遺体をキシユに移し、そこに葬った。そしてひとつの建物を極めて高く且つすばらしく完成させた。[Yazdī : I-200/156b]

この Jahāngīr を埋葬するために建てられた新しい建物も、後の記述においてタラガイの墓とともに述べられているから、やはりキシユ市内にあったことが判る。[Yazdī : I-566/287a-287b] 現在、キシユ市の東南部に Ḥadrat-i Imām と呼ばれる、北側に小さなモスクを伴い、円錐形の特徴的なドームを載いた高さ 27m の建物が残っているが、これが

10) Shāmī [72-73] は 778 年 (1376/77) の諸事件の後に述べ、Yazdī [I-199-201/156a-156b] はその死を 777 年 (1375/76) のこととするが、いずれも辰年 (1376) と記す。

Jahāngīr の廟であることはつとに知られてきた [Masson 1953 : II-125-126 ; Pugachenkova 1958 : 141 ; Pugachenkova 1976 : 81-86]。

そしてその四年後の781年春(1380年春), ティームールはキシュ市における大規模な建築事業に着手した。Samarqand 市内の建設事業(1370年開始)に遅れることはほぼ10年であったが, 「[781年半年(1379)に Khwārazm を征服したティームールは] 諸学者たちからなる貴顕たち, 並びに職人たち(からなる)臣民たちの全てを, Shahr-i Kish に(家族毎)移住させた(Khāna-kūch ba-Shahr-i Kish firistadand)」 [Yazdī : I-220 ; Tashkent ed. 欠] とあるごとく, その契機の一つとして, 1379年の Khwārazm 征服完了が考えられる。しかし, その後の特に墓廟建築へのティームールの熱意を考慮すると, 最愛の息子 Jahāngīr の急死という事態が以後のキシュ市における建築を促した最大の要素であったのではなかろうか。

Shāmī によれば,

[781年の] 春(1380年の春)の季節が来た時, キシュ市の建築に関して至高なる命令が発せられ, その城壁(hiṣār)が建築された。またこの時 Āq-sarāy も建造され, そのアーチ(ṭāq)と玄関(rivāq)がカペラ星(‘aiyūq)にまで到達したので, 世界中の誰ひとりとしてそれに匹敵する建造物をこれまで見たことも聞いたこともなかったほどであった。[Shāmī : 81]

Ḥafīz-i Abru はより詳細に次のごとく記す。

Amīr Ṣāhib-qirān 陛下は780年(1378. Apr. 30-1379. Apr. 18)の諸月にその市城壁(shahr-band)の建造を開始し, 同年中に完成させた。そして, 三年後に Herāt の町を征服した際, Herāt の市城壁を破壊して, 表面が鉄で造られたその市城門を Mavarā’ al-Nahr に運び, キシュ市の市城門に取り付けた。そして, (キシュは) Ṣāhib-qirān の治世中に繁栄の極に達した。(陛下は)そこに巨大な諸建造物をお建てになった。中でも Dār al-Siyādat の高い建物が注目されるが(az jumla(-yi?) Dār al-Siyādat ‘imarat-i ‘alī-st)¹¹⁾, (陛下は)豊かな村落(ḍiyā’ va ‘aqār-i abadān)と肥沃な領地(mustaghalāt-i ma’mūr)をそこに寄進された(vaḳf farmūda)。また陛下御自身のために, Āq Sarāy と名付けられた高い館を建てられたが, それは巨大な建物であり, そのアーチ状開放玄関(aivān)は数ファルサング先からでも見てとることができた。その

11) Barthold [1898 : 92] は「それらの内で, サイドたちの住居のための高い建物が[注目される]」(из них [замечательна] высокая постройка, служащая жилищем для сейидов)と訳す。

他に、多くの学院(madāris)や僧院(khwāniq)や旅宿(arbiṭa)や貯水槽(hiyaq)が、陛下の直臣やアミールや高官たちによって市内およびその周囲に建てられた。

[Barthold 1898: 90]

この両者の記述においては年代がやや食い違うが、Yazdī が Shāmī と同じく 781 年の春とする [Yazdī: I-221-222/163a] から、さしあたりこれを採用しておこう¹²⁾。

これらの記述によれば、キシユ市におけるティームールの建築事業には、主なものとして、市城壁、Dar al-Siyadat という名の建物、そして Āq Saray と呼ばれる巨大な宮殿が含まれていたことが分かる。

先ず市城壁が完成した。後のこの市城壁への Herāt の城門の移転について、Ḥafiz-i Abrū はさらに詳しく次のように記している。

[Herāt 陥落は 783 年 Muḥarram 月の上旬 (1381. Mar. 28-Apr. 6) のことであった。] その後、(陛下は)市内から移動して、Kuhdastān の草原に滞留された。そして旧市街の城塞(bārū-yi shahr-i qadīmī)を破壊し、(市)城壁(dīvār)に穴を穿つようにとの勅令が出された。この勅令に従って、城門(darvāz-hā)が掘り起こされ、兵士達が堀に投げ込まれ(muqātil-hā-rā dar khandaq rīkhtand)、穴が城壁に穿たれた。そして(Herāt の)Malik 達の称号(alqāb)が書き込まれた鉄製の市城門は注意深く保存され、それを Shahr-i Sabz へ運ぶようにとの命令が為された。それらは現在に至るまで Shahr-i Sabz の市城門に取付られている。また長年かかって Kurt 家の Malik 達が集めてきた王家の財宝が城塞から運び出された。また、muḥaqqar-i māli (保証金?)を市民達に課し、三・四日の間に支払われるようにした。そして、市内および郊外より有力な家長達(kadkhudā-yi mu'tabar)を二百人指名して、Shahr-i Sabz へ移してそこに居住させ、Tirmid の知事(ḥakim)であった Amīr Tīmūr-tāsh をこの任務(の責任者の地位)に就けた。[Ḥafiz-i Abrū 1959: 65-66; cf. Yazdī: I-236-237]

この Herāt 征服は、ティームールが政權掌握後イラン方面に敢行した最初の軍事遠征の成果であり、Kurt 政權が一世紀余りに亘ってイラン文化の拠点として守り続けて来た町の市城門のキシユ市への移転は、まさにその記念としての大きな意味を有したに違いない。Herāt の有力な市民のキシユ市への移住政策とともに、キシユの町の発展にけるティームールの熱意の程が窺われよう。

このキシユ市の城壁(ḥiṣār, shahr-band)の規模などについては、現存する遺構からも

12) Masson [1953: I-113-114] は Ḥafiz-i Abrū の記述を採用して、780 年中に市城壁が完成したとするが、一方でその建築作業が 781 年にまで食い込んだ可能性をも考慮する。

ある程度推測できるが、考古学調査によれば、当時のキシュ市は周囲約4kmのたて軸が少し長い長方形の城壁によって囲まれていたことが判明した。城壁は庭部の厚さが最も厚い個所で8-9m、高さが約11mで、割石と藁や枝などを粘土でこねたいわゆるパフサ(pakhsa)積みによって造られており、ほぼ50m毎に半円形の塔が設けられ、深い堀が巡らされていた。東西南北にそれぞれ城門が設けられ、いずれもはね橋によって守られていた。Herātの鉄製の市城門が据え付けられたのは、Samarqandへ向かって開く北門であったと推測されている。そして、城内は、各城門から東西・南北に走る二本の幹線道路がほぼ中央部にて交差しており、この交差点に位置するドーム屋根を戴く中央市場 chaharsūq から東西に店舗が延びていたという[Masson 1953 : I-114 ; Pugachenkova 1958 : 135-136 ; Pugachenkova 1976 : 60]。

一方、市城壁とともに建築が開始された Āq Sarāy については、Shāmī及び Yazdī がティームールの逗留する宮殿としてしばしば言及しており[Shāmī : 81, 97, 167 ; Yazdī : I-566, 577, II -141, 419/287a, 291a, 346a, 456b]、さらに現在その一部が保存され Shahr-i Sabz 市における最大の観光名所として広く知られているから、その所在については問題がない。この宮殿はキシュの市城壁内の東北部、北門に近い個所に、高いアーチ形天井を持つ玄関をほぼ北に向けてそびえ立っていた。現在は左右の八面体の台の上に積まれた分厚い側塔とアーチの基部が残っているのみだが、それでも約30mの高さに達する。本来の高さは50m近かったと推測される。その表面はティームール朝独特の深い青色あるいは明るい空色を中心とするモザイク・タイルの幾何学模様や文字によって鮮やかに装飾されている。内部は、かつては約100mの奥行きを持つ石畳の中庭を隔てて、謁見室や会議室を中心に居室・宴会室・客室を有した大規模な宮殿であったが、ここも今は石畳の一部を残して全体が近代的な公園として整備されている[Masson 1953 : I-116-123 ; Pugachenkova 1958 : 137-139 ; Pugachenkova 1976 : 62-75]¹³⁾。

他方、Dār al-Siyadat の名は上記の Ḥafiz-i Abrū 以外のティームール朝史料には見出されない。しかし、Āq Sarāy とともにキシュを代表する巨大な建築として挙げられてい

13) 従来、キシュ市に建築された諸建築、特に Āq Sarāy に Khwārazm の伝統様式を見出し、それが専ら1379年頃に Khwārazm から移住した職人たちの手になるものとする見解が有力であったが、しかしその後イランやイラクの諸都市からの移住者によって職人の構成が著しく変わっている点、並びに美術史的観点からもそれが必ずしも Khwārazm の伝統上に位置しないことが明らかになり、現在はこの見解は修正を余儀なくされている[Masson 1953 : I-124-125]。Pugachenkova [1976 : 61-62] は、ここに中央アジア建築の新たな様式の成立を見出してさえている。

る建物が諸史料において無視されてきたとは考えにくい。この点を考慮しつつ先へ進むことにする。

IV

さて、この後の791/792年の冬(1389年冬)には、タラガイの妃であった(つまりティームールの義母にあたる)Qadaq Khatūn が没し、キシユに埋葬された[Yazdī: I-351/206a-206b]。この場合のキシユも、先の Jahāngīr の例に見られたごとく、キシユ市を指すと考えて良いであろう。ただし、市内のどこに葬られたかは不明である。

そして、796年 Rabī' I月1日(1394年1/2月)、次男の'Umar Shaykh がKurdistan にて戦死した。Yazdī によれば、

(父 'Umar Shaykh の地位を継いだ)皇子 Pīr Muḥammad は父のアミール達および Ūj-qara とともに Shīraz に向かった。そして殉教した皇子の棺は Khurmatu の地から Shīraz へ移され、仮の墓地に納められた。しばらく後に、彼('Umar Shaykh)の妃たち, Sūnij Qutlugh Āgha, Bīk Malik Āgha, Malikat Āgha と、若年であったので Shīraz に留まっていた彼の息子、皇子 Iskandar とは、その棺を Shīraz からキシユに運んだ。

彼の魂(ravān)は赴きし(ravān shud), 平安の家へ

彼の水と泥(から造られし肉体)は向かいし、キシユへ、サラーム!

そして、その地において, Sahib-qiran 陛下のお造りになった建物に埋葬した。

かれの墓が輝かしく且つ光に満ちてあれ!

Karbala の殉教者(Imām Ḥusayn)とともに復活せよ!

[Yazdī: I-473-475/254a-b]

'Umar Shaykh の遺体の移送は, Ḥafiz-i Abrū によれば, 799年(1396/97)頃のことであった[Ḥafiz-i Abrū 1956: 129]。この場合のキシユも、ティームールの建てた建物に葬ったというから、キシユ市であることは間違いない。

Yazdī はさらにこれに続けて以下のごとき貴重な情報を記す。

(皇子 'Umar Shaykh の棺のキシユへの)移送の理由(は以下のごとくである。)至高なる Ṣahib-qiran 陛下の帝国の秩序において、イラン人の全ての住地が Turan と結ばれ繋がるに至ったので、陛下はキシユにひとつの建物を建て完成させた。その場所は, qibla の方向(南西)に偉大なる Shaykh, Shams al-Dīn Kulār の聖なる廟と、彼(Timūr)の名だたる父, Amīr Ṭarāghay の墓地が位置していたところであった。また、

その建物の左右に、皇子 Jahāngīr や他の栄光ある子孫達のためのいくつかの墓廟と建物をお創りになった。そして, Ṣahib-qiran 陛下の永遠なる王国が、神の力の印である証と聖なる恩寵の印である偉大さによって支えられていたので、強力なる天上の助力者や支援者達は陛下に対して、単に財物や地位の獲得その他の世俗的な目的のみを動機としない忠誠を維持した。かくして、忠実なる従者の一人であった Amīr Āqbūgha などは、その生涯いかなる状況、いかなる場所にあっても、決して陛下の声が聞こえる方向に背を向けて座することなく、また休む時にもその方向に足を向けることがなかったほどであった。こうした忠誠の故に、左右両翼のアミールたちや他の幸運なる私臣たちは、上述の建物に対してそれぞれ自らの定められた位置(mūrchal)に従って墓を建てていた。そして「たれもいずこの地で死ぬかを知らぬ」との神の命によってどこで死のうとも、遺言に従って彼ら(の遺体)はその墓に運ばれた。[Yazdī : I-475-476/254b]

mūrchal とは、モンゴル語の bolja-(時や場所を前もって指定すること)から来た語で、主に軍隊の集合が予定された地点及び時を意味する [Doerfer 1963 : I-229-232]。この場合には、ティームール軍内において定められていた部隊配置を指したものであろう。

ここに述べられているティームールが建てた建物は、その記述内容からも、また皇子 ‘Umar Shaykh の棺が再埋葬されていることから、墓廟建築に相違ない。そして「その建物」は、Shaykh Shams al-Dīn Kulār 廟とタラガイの墓の東北に位置し、左右に皇子 Jahāngīr 並びにティームールの子孫たちのための墓廟(ここに皇子 ‘Umar Shaykh が葬られたはず)に従えていた。そして、ティームール配下のアミールや直臣たちの墓が、「その建物」に対して mūrchal つまり左翼・右翼といった部隊配置に従って夫々設けられていたという。こうした墓の配置、特に mūrchal に従った配置は、その中心に全軍を統べる存在を想定してこそ意味を持つ。Amīr Āqbūgha の例に見るまでもなく、当然その中心はティームールその人であったはずであり、必然的に「その建物」はティームール自身のためのものでなければならない。この建築の性格上、「その建物」がティームール自身の墓廟として建てられたものであったことは明白である。

キシュ市にティームールが自らの墓を建てたことを明確に記述したものは、管見では、この Yazdī の間接的であいまいな記述以外にはティームール朝史料には見当たらない。それは、単に高貴な人物の死に触れるのを忌避する姿勢の表れであったか、それとも現実にはティームールがサマルカンドに葬られたという事情と関連していたのであろうか。後者の点に関しては、ティームールはなぜキシュではなく、サマルカンドに葬られたのか

という問題として、Barthold 以来しばしば取り上げられてきたが、必ずしも納得のいく答えは出されていない[Barthold 1916]。この問題は単にティームールの埋葬についてばかりではなく、ティームール死後の王朝内における様々な思惑や政権を巡る葛藤の本質に関わるものであるだけに、今後とも慎重に追及されなければならない重大問題であるが、本稿では当面の課題とは異なるのでこれ以上は触れない。

所で、キシユにおけるティームールの墓の存在に関しては、ティームール朝史料とは全く異なる情報源から確認できるのである。つまり、先に引用したスペイン、カスティーリャ王国の使節 Clavijo による報告がそれである。彼は1404年の8月末にキシユ市に三日ばかり滞在し、この町について貴重な記録を残した。そこには、次のように記されている。

キシユの町は土塁で囲まれていて、深い堀もあり、城門のところのはね橋でだけ渡れるようになっている。ティームール公はまさにこのキシユの生まれで、彼の父もこの出身だった。町じゅうにりっぱな家やイスラム寺院がたくさんあり、とくにある巨大な寺院は、ティームールが建立を命じ、いまなお完成していない。この寺にはその父が葬られているお堂があり、その隣にはもう一つのお堂が現在建造中であるが、そのなかには、その時が来ればティームール自身が葬られるはずである。われわれの到着より一月ほど前に、ティームールは[サマルカンドへの帰途]キシユへ来たが、このお堂を見てその入口が低すぎるのが不満で、もっと高くするように命じ、その改造箇所でのときも職人たちは仕事をしていた。このお寺には、また、死んだティームールの長子ジャハングル皇子の墓もある。このお寺全体がそのお堂などと共に青色金色のタイルでみごとに細工されており、なかに入ると大きな中庭があって、ため池を中央にして木が植えられてある。ここでは、日々、ティームールの特命により20匹分の羊肉が調理され、施されているが、それはこのお堂に葬られているその父と息子の供養のためである。われわれはキシユの町に入るとすぐにこのお寺に連れて行かれた。

これに続いて明らかに Āq Sarāy と分かる宮殿について詳しい記述が為され、最後に次のように記されている。

さきに述べたイスラム寺院もこれらの宮殿も、ともにティームールが着手した仕事で、未だ完成していないけれど、いずれも、まずはここに葬られているその父の記念のためであり、第二には、話したとおり、彼、ティームールがこのキシユの町出身だからである。[Clavijo 1928 : 206-210 ; Clavijo 1967 : 187-189]

ここにはティームールが精魂傾けて「建造」したキシユ市の姿に直に接した目撃者の証言がある。堀と城壁に囲まれた市内には多数の建物がひしめいており、いまだ建造中のも

のもあった。わけでも Clavijo の注意を引きつけたのは、ティームールが建てた巨大な「寺院」(mezquita)であった。彼によれば、この「寺院」の中には、ティームールの父タラガイの葬られている「お堂」と長子 Jahāngīr の「墓」と、さらになお建造中のティームール自身のための「お堂」があった。つまり、この「寺院」はいくつかの「お堂」あるいは「墓」から構成されていた複合建築であったことが推測される。この記述を先に掲げたティームール自身の墓廟についての Yazdī の記述と比較すると、タラガイの墓の位置に関して以外はほとんど差異はない。Clavijo のいう「寺院」が、ティームールの廟を中心にその左右に皇子たちの墓を配した Yazdī の記すところの建造物全体を指すことは明らかである。

いずれにせよ、ティームール自身はキシュ市に埋葬されることを望み、そこに自らの墓を建造していた。当然のこととして、その墓は大帝国の主にあつた規模を備えていた筈であり、その片鱗は Clavijo の記述からも充分窺える。かくして、先に掲げた Ḥafiz-i Abrū の記述において、Āq Saray と並んでキシュ市の代表的な建築とされていた Dār al-Siyādat と称される建物が、再び想起される。まさしくこの Dār al-Siyādatこそ、ティームール自身の墓廟そのものを示す名称ではなかったか。Clavijo が記す、この「寺院」の中庭における多量の施しは、Ḥafiz-i Abrū の言う、豊かな村や領地からなるワクフによって保証されえたのではないだろうか。そうすれば、この Dār al-Siyādat という名称は、Barthold のごとく単に“サイイドたちの住居”(жилище для сейидов)とするのではなく、Masson が示唆するごとく、“権威の館”とした方が適切であろう [Barthold 1898: 92; Masson 1953: II -123]¹⁴⁾。この Dār al-Siyādat の内、Jahāngīr の廟に関してはすでに所在は確認した。即ち、それは市内の東南部の、Shaykh Shams al-Dīn Kulār とタラガイの墓を西南西に、つまり Yazdī が記すごとくほぼ qibla(西南)の方角に望む地点にある。当然ながら、ティームールや ‘Umar Shaykh の墓もそのすぐ近くになければならない。

1933年、Jahāngīr 廟の東南隅から東南東へ35mの地点の地下に大きなドーム形天井を持つ地下墓が発見された。その後、Masson 等による本格的な調査により、6.40m ×

14) Dār al-Siyādat をこのティームールの墓廟の名称とする観点は、すでに Masson によって提起されているが、少なくとも1953年の彼の論文を見る限り、Yazdī や Babur があたかもこの名をティームールの墓廟の名として明記しているかのごとく述べ、この同定に至った根拠は明確には示されていない [Masson 1953: II -123, 128]。しかし、その文脈から彼が17世紀の Maḥṭha (Muḥammad Badr’ b. Muḥammad Sharif Samarqandī)なる人物の詩人伝に依拠していることがろうじて推測できる。Маньковская [1978: 26] は、Maḥṭha によってこの同定を確認しているが、遺憾ながらこの史料の所在や内容については不明である。

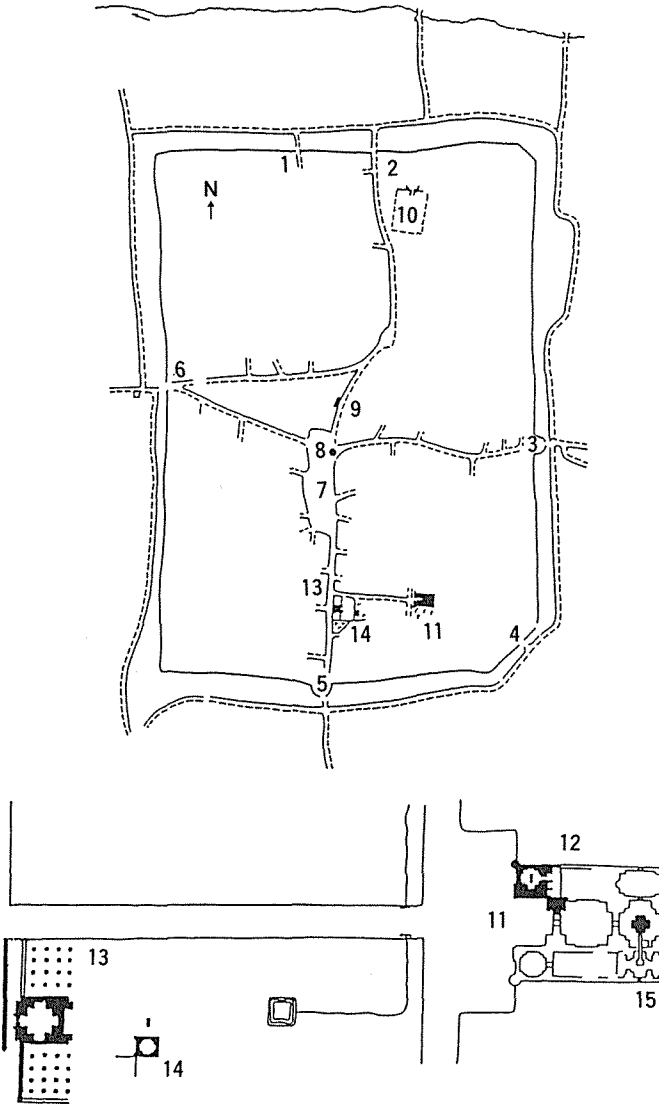
6. 12mの十字形の墓室は床も壁も天井も全て、固くて白い透明な石灰岩並びに砂岩の厚板をもって覆われ、床の中央に据えられた2.5m×1.4m×0.73mの棺は大理石製といった、極めて頑丈に且つ贅沢に造られており、またその石棺には墓碑銘が刻まれていないことなどから、それがティームールのためのものと結論づけられるに至った。かくして、Jahāngīr 廟とティームールの墓室とを中心に、現在失われている Dar al-Siyādat の他の部分及び全容の復元が試みられ、ティームールの地下墓室の上に建てられた彼自身の廟を東端にして、西に向かって開いた八つの部分から成る複合建築の存在が確認された。それは東西70m、南北50mの長方形を成し、中央に20m四方のホールが、その西側には差渡し20mのアーチを持つ正面玄関(pīsh-taq)が位置するという一つの巨大な建造物であった。そして、北西端の Jahāngīr 廟と玄関を夾んで南側に ‘Umar Shaykh の廟があったに違いない。即ち、現存の Jahāngīr 廟の南面の壁は、Dar al-Siyādat の玄関の側壁を成したものであり、西北端の塔は建物正面の右端に位置していたものと対を成すはずのものであった。また、この建物の東西軸の延長上にいわば参道が西へ向かって大通りまで伸び、その両側にはティームールのアミールや高官たちの墓や廟が、まさに mūrchal に従って立ち並んでいたと推測される [Masson 1953 : II -126-129; Pugachenkova 1958 : 141-142; Pugachenkova 1976 : 86-91 ; Маньковская 1978 : 10-13]。Pugachenkova [1958 : 140] の縮尺によれば、この壮大なる Dar al-Siyādat の前には、その東端から参道の入口までの東西約300m、南北約150mにも及ぶ広大な墓域がかつて広がっていた。まさしく Dar al-Siyādat は Āq Sarāy とともに、当時のキシユ市の繁栄を象徴するものであり、そしてそれは、あくまでもティームールが自身と自身の父や子のために造り上げたものであった。

おわりに

以上、ティームールとキシユ市との関係について、基本史料に記された情報を整理し、若干の問題点を挙げつつ、従来の歴史学・考古学研究の成果との照合を試みた。この限りでの両者の関係をまとめてみるならば、先ず、ティームールの生地と、彼の一族の墓地がいずれもキシユ市の近在にあり、また父とともに青年時代の彼が影響を受けた Shaykh Shams al-Dīn Kulār の廟がキシユ市内に存在した。こうした関係から、1370年の政権獲得後、父タラガイを改葬した(1373/74)のを手始めに、長男 Jahāngīr(1376/77)、タラガイの妃 Qadaq Khatūn(1389)、次男 ‘Umar Shaykh(1396/97)を次々とキシユ市内に埋葬した。この間の1380年前後には、キシユに市城壁、Āq Sarāy 宮殿、そして Dar al-Siyādat と呼ぶ墓廟を中心とする大規模な建築事業を開始した。この経過はティームール自身の政権担

当者としての地位の確立過程に即応していたと思われ、1380年前後がひとつの画期であったことを示している。即ち、等しく「アミール・ティームール」と称しながらも、その意味するところがこの時期前後に大きな変化を遂げたと考えられる。その点で特に、ティームール自身の墓を中心に Jahāngīr, 'Umar Shaykh 等の墓廟を配した大規模な複合建築である Dār al-Siyadat は、重要な意義を持つ。それは、父タラガイの死をきっかけとして、あるいはより直接的には最愛の長子 Jahāngīr の急死という事件を契機に建築が意図されたと思われるが、まさにマールワランナフルにおける王家として上昇しつつあったティームール一族の墓地として建造されたものであると言えよう。ここに、「ティームール政権」から「ティームール朝」への変貌の一側面を見て取ることができるのではないだろうか。

所で、ティームールのキシュ市への関心については、従来、Barlas 族の集中的に住む地域であったための政治的判断から発したもので、決して自身の生地を高めようとしたためではなかったとする M.E.Masson の見解が代表的なものである [Masson 1953 : 108 ; Bosworth 1980 : 182]。勿論、Barlas 族対策という意味も無視しえないが、以上の観点から、キシュ市はむしろティームール個人及びティームール家との極めて私的な関係の中に位置づけられる町であったと言えるのではないか。Clavijo は、キシュ市における建築の第一の理由として、父を記念するため並びにティームールがその町(実際にはその近在)の出身であったための二点をあげているが、そこにティームールとキシュ市との関係が端的に言い表わされているように思われる。



【Shahr-i Kish at the time of Tīmūr and Ulugh Beg】

1-6 City Gates ; 7 Bāzār ; 8 Chahār Sūq ; 9 Bath ; 10 Āq Sarāy ; 11 Dār al-Siyadat ;
 12 Mausoleum of Jahāngīr (Ḥadrat-i Imām) ; 13 Mosque of Ulugh Beg (Gök Gunbadh) ;
 14 Ulugh Beg's dynastic mausoleum (Gunbadh-i Sayyidān) (Mausoleum of Shams al-Dīn Kulār ; Mausoleum of Taraghāy) ; 15 Burial vault of Tīmūr

参考文献

[1]

Shāmī, Nizām al-Dīn

Zafar-nāma, ed. by Tauer, F., I, Prague, 1937.

Ḥafiz-i Abrū

1956 *Zubdat al-Tavārikh*, in *Nizām al-Dīn Shāmī, Zafar-nāma*, ed. by Tauer, F., II, Prague.1959 *Cinq Opuscules de Ḥafiz-i Abrū, concernant l'Histoire de l'Iran au Temps de Tamerlan*, édition critique par Felix Tauer, Prague.

Yazdī, Sharaf al-Dīn 'Alī

Zafar-nāma, ed. by 'Abbāsī, M., I-II, Tehrān, 1957./ed. by Urunbayev, A., Tashkent, 1972.

Naṭanzī, Mu'īn al-Dīn

Muntakhab al-Tavārikh, ed. by Aubin, J., Tehrān, 1957.

Ibn 'Arabshāh

'Ajāib al-Maqdūr fi Akhbār Tīmūr, tr. into Persian by Najātī, M., Tīhrān, 1960.

Clavijo, Ruy Gonzalez de

1928 *Embassy to Tamerlane 1403-1406*, tr. by Guy Le Strange, London.

1967 『チムール帝国紀行』, 山田信夫訳, 桃源社.

[2]

Barthold, V. V.

1898(1973) Хафиз-и Аbru и его сочинения, Сочинения, VIII, стр. 74-97, Москва.

1916(1974) Rogers, J. M. (tr.), The Burial of Tīmūr, *Iran, Journal of the British Institute of Persian Studies*, XII, 65-87.1918 Улугбек и его время, Сочинения, II(2), стр. 23-196, Москва, 1964./Minorsky, V. & T. (tr.), Ulugh-beg, *Four Studies on the History of Central Asia*, vol. II, Leiden, 1958.1962 *Zwölf Vorlesungen über Geschichte der Türken Mittelasiens*, Hildesheim.1968 *Turkestan Down to the Mongol Invasion*, London.

Beg, M. A. J.

1978 al-Khāṣṣa wa 'l-'Āmma, *E.I.*, N.E., IV, 1098-1100, Leiden.

Bosworth, C. E.

1980 Kish, *E.I.*, N.E., V, 181-182, Leiden.

Doerfer, G.

1963 *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen*, Wiesbaden.

加藤 和秀

1970 O. Д. Чехови́ч 編著「14世紀ブハラのワクフ文書」, 『東洋学報』, 52(4), 116-136.

1971 14世紀前半ブハラ農村社会に関する一考察——kadivar 農民と muzāri 農民について——, 『オリエント』, 14(2), 79-92.

1979 ティームール朝の成立, 月刊『シルクロード』, 5(2), 61-65.

Крашенинникова, Н. З. И.

1978 Изучение цитадели Кеша, Археологические открытия 1977 года, стр.527, Москва.

Lambton, A. K. S.

1978 Early Timurid theories of state : Ḥafīz Abrū and Nizām al-Dīn Šāmī, *Bulletin d'études orientales*, 30, 1-9.

Лунина, С. Б., Усманова, З. И.

1969 Работы Кешской археолого-топографической экспедиции, Археологические открытия 1968 года, стр. 423-24, Москва.

Маньковская, Л. Ю.

1978 Доруссиадат, Ташкент.

間野 英二

1976 アミール・ティームール・キュレゲン——ティームール家の系譜とティームールの立場, 『東洋史研究』, 34(4), 109-133.

Manz, B. F.

1976 Administration and the delegation of authority in Temür's dominions, *Central Asiatic Journal*, 20, 191-207.

Masson, M. E.

1953 (1978 & 1980) & Pugachenkova, G.A., tr. by Rogers, J.M., Shahr-i Sabz from Timūr to Ūlūgh Beg, I - II, *Iran, Journal of the British Institute of Persian Studies*, XVI, 103-126 & XVIII, 121-143.

1957 Исторический этюд по нумизматике Джагатаидов, Труды Среднеазиатского государственного университета им В. И. Ленина, Новая серия, вып. CXI, стр.41-108.

Pugachenkova, G. A.

1958 & Ремпель, Л.И., Выдающиеся памятники архитектуры Узбекистана, Ташкент.

1976 Термез, Шахриябз, Хиба, Москва.

Roemer, H. R.

1986 Tīmūr in Iran, *the Cambridge History of Iran*, vol. 6, 42-97, Cambridge.

Strange, G. Le.

1966 *The Lands of the Eastern Caliphate*, London.

Усманова, З. И.

1973 К вопросу о ранней античной керамике древней области Кеш, История материальной культуры Узбекистана, вып. 10, стр. 52-57, Ташкент.

Woods, J. E.

1987 The rise of Tīmūrid historiography, *Journal of Near Eastern Studies*, 46(2), 81-108.

Якубовский, А.

1946 Тимур, Опыт краткой характеристики, Вопросы истории, 8-9, стр. 42-74.